

大きさの歯間鼓形空隙が得られるような形態にしました。

回 答：菅原 教修（保存2）

石橋先生へ

1. 症例2は根管閉鎖のため十分な根管充填は出来ませんでした。Temporary resin crown から補綴物装着への判断基準は、主訴であった咬合時の不快感がとれた時点。患者にその点を確認し、日常の咀嚼に役立っているということで Tek から鋳造冠にしなかったのは Tek で経過観察し単一冠でも咬合できると判断したからです。

2. 症例3で Root separation 後の近心歯冠部と遠心歯冠部に各々別個に鋳造冠を装着したのは骨植が良好で、連結の必要がないと思われたからです。

田中先生へ

1. 症例1, 2ともに咬合面には咬耗がみられます。症例1は60代の半ばの患者さんで自然咬耗です。症例2は、紹介を受けた時点ですでに咬合調整、根管治療などがなされたためのものです。

症例1, 2ともに Bruxiom はありませんでした。

2. 症例3は補綴物装着後のX線写真はとっておりますが今回はスライドにして供覧しませんでした。

演題12 ミニブタの上下顎及び歯列の経年的変化に関する研究

○伊藤 一三, 都筑 文男, 藤村 朗
横須賀 均, 大沢 得二, 佐々木 利明
野坂 洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

ブタは咀嚼様式が雑食性であることから、咬合、発育様式などヒトと類似しており、実験動物として用いられているが、最近、小型で扱いやすいミニブタが注目されてきた。しかし、これに関する経年的観察はみあたらない。そこでゲッチングミニチュアスワイン6頭を用い生後6.5ヶ月から24.5ヶ月の間、1週毎に観察した。方法としては、塩酸ケタミン 1ml/kg の腎筋内注射全麻下で、口腔内診査、X線撮影、印象採得をおこない咬合平面を基準とした模型上で上下顎の成長変化を観察し、以下のことがわかった。歯牙の萌出と交換：乳歯列は $i_1, i_2, i_3, c, m_1, m_2, m_3$ であり、 m_1 の近心部に P_1 が萌出するが上顎では $\frac{1}{2}$ の個体で欠如し、下顎では全列欠如していた。

交換の順序は $P_3 \rightarrow P_4 \rightarrow P_2$ 順に m_1, m_2, m_3 とそれぞれ交換するが M_2 の萌出は下顎ではP群交換前の12~15ヶ月目であり、上顎では逆にその後で16~18ヶ月目に萌出する。一般には下顎歯が上顎歯より、2~3週早く萌出する。横口蓋ヒダの特徴と経年的変化：左右とも平均22本であり、正中から歯肉縁まで全走するが、小白歯部では途中でとぎれる短いものが比較的多い。経年的には幅径は増加し、各ヒダとも24ヶ月までに2.5mmほど増加するが、高さは経年的変化を示さず常に1~2mmであった。歯牙とヒダとの関係は第3小白歯部までは経年的変化はみられず一定の関係を保ち、大白歯部は萌出時に後方のヒダの移動がみられた。上顎歯槽幅及び口蓋長：幅径の変化は大歯部で著しく、24ヶ月までに37.2mm増加し、口蓋長は約50mm増加するが、この成長中心は P_1 部にあり、犬歯部は、経年的に徐々に増大し、大白歯部は萌出直前までに著しい増加がみられた。下顎においてもほぼ同様であった。歯牙の大きさ：頬舌径、近遠心径ともにより遠心位の歯牙ほど大きい。小白歯群で Crown index をみると上顎で P_1 は238, P_2 で229, P_3 で136, P_4 は95.92となり P_4 をのぞいていずれも近遠心径が大きい。下顎でも近遠心径が大きかった。以上、顎骨の発育中心点、歯牙の欠如、年令判定などの有効な資料が得られ、今後実験を行う際の参考となるであろう。

演題13 翼突筋静脈叢の局所解剖学的研究

○横須賀 均, 伊藤 一三, 野坂 洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

顎顔面の静脈と静脈叢は、頭蓋内の静脈洞と至近距離にあり、何重にもなった静脈の連絡網を構成するため顔面の炎症が容易に頭蓋内に波及することから重要である。これらの静脈叢を構成する静脈および静脈叢に関する報告は多々なされている。しかし、下顎骨からの血流の帰路については、下顎骨の成長発育と関連して経年的にその静脈の数、太さ、流入位置などに差異があることが予想される。そこで、顎骨と翼突筋静脈叢との関係を周囲の骨、筋との関係も含めて明らかにするため、胎齢5~10ヶ月の日本人胎児を各月齢2体4側、40~80歳代の日本人成人屍体16体16側を用い、10倍の実体顕微鏡下で剖出観察を行った。その際、周囲組織と翼突筋静脈叢との関係を正確に記すた